

井上文雄研究史・補遺（其ノ五）

鈴木 亮

はじめに

本稿は、徳川時代後期国学者歌人井上文雄（寛政十二年八月十五日～明治四年十一月十八日、七十二歳）の研究史にして、以下の拙稿の遺漏を補ふとともに、其の誤りを訂したものである。

「井上文雄研究史」（『成蹊人文研究』十三号、平成十七年三月）

「井上文雄研究史（補遺）」（『成蹊國文』四十一号、平成二十年三月）

「井上文雄研究史・補遺（其ノ二）」（『成蹊國文』四十三号、平成二十二年三月）

「井上文雄研究史・補遺（其ノ三）」（『成蹊人文研究』二十八号、令和二年三月）

「井上文雄研究史・補遺（其ノ四）」（『成蹊人文研究』三十号、令和四年三月）

前稿迄と同様、百科事典、文学年表の類、及び文雄の著述『大井川行幸和歌考証』『冠註大和物語』の説を援用したもの、門人に關する論考は原則としてこれを割愛した。なほ、文雄の和歌一首のみ

を引用した文献に就ては、其の内容から省略したものも存する。

一、明治期

・文雄歿後一年余り、門人松の門三艸子の記事であるのだが、文雄宅の住所が分かるので此処に紹介する。「来る三月廿三日、第一大区小十五の区坂本町一丁目歌人井上文雄宅にて、松登三草子なる者、師の道を経て歌会を為すとの事なり、有志の君子来臨ありたき事を乞ふのみ。」（『東京日日新聞』明治六年二月二十一日）。

・二宮尊徳の門人にして、箱根湯本に旅館業を営んだ福住正兄が箱根を詠んだ詩歌を集めた『箱根草 第一集』（明治十二年七月、穴山篤太郎）には「箱根にて」、「同 第二集」（明治十二年十一月、穴山泉樓は、福住旅館金泉樓（神奈川県足柄下郡箱根町湯本）のこと。

・福住正兄は亦、詩歌集『相陽名勝集』を編輯してをり、その第二号（明治十六年一月、福住九蔵）に「重忠屋敷といふ処を過て」と

題した文雄の一首を収める。

・佐々木信綱は僅か十二歳にして『文章作例集 上下』(明治十六年十二月、佐々木信綱)を編纂してをり(弘綱門人阪倉周有が書拔を作つておいたものを増補)、文雄は「山家梅」「惜花」「旧都」「閑居」「竹」「玉」「少年行」七編の文章が収められる。

・嘉永五年から明治元年までの編年体の史料集、吉野真保「嘉永明治年間録 卷十七下」(明治十六年十二月、甫喜山景雄) 慶応四年(明治元年)の「諸家感慨詩歌」の項に『諷歌新聞』より「あはれ君かきこもります此うへの世の中いかにかりらむ」が、草野御牧の一首とともに紹介せられる。

・『井上文雄翁家集』三冊(明治十七年四月、小川三艸)は、家集『調鶴集』の覆刻版。発行者小川三艸は、門人松の門三艸子である。

・本居豊穎、鈴木重嶺、間島冬道等、当時に於る名家の詠を集めた平井元満の編にかゝる『東京大家十四家集』(明治十六年十月、若葉園)だが、海上胤平はそれらの歌人を論ふべく『東京大家十四家集評論 上下』(明治十七年十一月、晩成堂)を著す。豊穎の詠「初恋」を批判してゐる箇所(下巻)で「語文の詞とり出近き頃井上文雄といひしものかゝるさまよみてものしらぬ人などおとろかしたるなめり」と、文雄への非難も述べる。

・鈴木重嶺は、「近來親友及門下の物故せし者多きを悲み其靈魂を慰めん為」明治二十一年六月三十日に「追悼会」を催す旨広告を掲載した。「被祭者」として、三条西季知、井上文雄、近藤芳樹、加

藤千浪等の名が挙がる(水原史郎編『筆の花 第五集』明治二十一年五月、花雨吟社)。

・明治二十二年九月には、歌論書『伊勢の家つと』三編三冊(梶田勘助)も覆刻版として出版せられる。

・あ、え「井上文雄先生ノ事ヲ記ス」(『少年園』二卷二十二号、明治二十二年九月、少年園)、ある晩文雄宅に「賊」が這入つてきたが、「もの、ふの人こむ宿は何もなし、こかねのせにの花はさけとも」の一首を詠んで示したところ、賊は何もせず帰つて行つたといふ逸話が記される。著者「あ、え」は栃木の人、本名は定かならず。

・上田万年編『国文学 卷之一』(明治二十三年五月、雙々館)には、名所霞と題する「柳はら霞わたれるけさ見れば六田は春のよにぞありける」の一首が引かれ、略伝も記される。

・小杉楓邨「阿波国土佐泊の碑」(『大八洲学会雑誌』卷之五十、明治二十三年六月、大八洲学会)は、文雄の記した、潮明寺(徳島県鳴門市)にある紀貫之歌碑の銘文に関する一つの挿話。碑に文雄の撰文を刻してゐる折、「この歌(註：年ごろを住みしところの名にし負へば来寄る波をもあはれとぞみる)かの日記には見えねど、口碑に伝へたる」とあるを楓邨が不審に思ひ、江戸の文雄に手紙を送つたところ、文雄の記憶違ひであつたことが判明し、正しく作り直したといふもの。文雄の楓邨宛書翰も引用せられる。

・佐々木信綱編『日本文範 下編』(明治二十三年六月、博文館)は、

『調鶴集』より「惜花」「暁擗衣」「寒夜読書」「旧都」「古戰場」「閑居」「竹」「玉」「長歌論」九編の文章を収める。

・野涯篁斎（正通）『高等作文全書』（明治二十四年二月、図書出版）は、『柯堂文集』（正しくは『調鶴集』文集の部「柯堂文章」）より「寒夜読書」を収める。

・天野御民『歴世記事詠史百首』（明治二十四年九月、博文館）は、『毛利元就陶晴賢を嚴島に誅す』の章に於て文雄の一首「はかりけん塩もかひなくいつくしま世にいつかる、はしめなりけり」を引き、解説を附す。

・『穎才新誌』七四二号（明治二十四年十月、穎才新誌社）所収「歌文叢談」には、崎山欽八といふ「五十余りなる老人」が文雄と仲田顕忠に点を求めた逸話が記される。

・明治二十四年十一月八日、文雄の二十三年忌（祭）が催され「初冬落葉」の題で歌が詠まれた。以下、それらの歌を管見の及ぶ限り掲げる（歌集の刊年順）。

三田葆光『楹紅葉』（明治四十五年六月、三田信編刊）

明治二十四年十一月八日井上文雄ぬしが二十三年忌に初冬落葉といふことを

花もみぢにほひし庭も冬の来てこずゑむなしくなるおちばかな
にぎはひしうゑ木のたなも冬がれておちばのみこそちりつもあり
けれ

植木店は八丁堀の地名にて文雄ぬし住みしところなり

平岡好国『藤の舎集』（大正七年六月、平岡好文編刊）

井上文雄師翁の靈祭の日に初冬落葉と云ふことを

神無月風にほろ／＼こぼる、は袖をぬるての紅葉也鳥

松の門三艸子『松の門三艸子歌集』（大峰筆子編、大正九年十二月、松の門三艸子歌集編纂所）

初冬落葉 井上文雄翁忌日

秋にさへ別れしま、の袖とめて哀もみちのちりかゝるかな

立花鑑寛『百千草』（大正十一年五月、立花寛治編刊）

井上文雄か年祭に初冬の落葉をよめる

いにしへをしのふ涙は冬の来て落るこのはのたくひなりけり

井上頼圀『神習舎歌文集』（逸見伸三郎、田辺勝哉編『神習舎歌文集・神習舎玉籠目録』大正十五年一月、朝賀喜一）

明治二十四年十一月八日井上文雄か二十三年祭に初冬落葉

と云ふことをよめる

松はかり立てる門にももみち葉の散りくる冬になりけるかな

なほ、画家石井柏亭の父鼎湖の絵日記にも（明治二十四年十月）二十日……文雄翁二十三年追善書画会来十一月八日中村樓ニ於テ催シ候旨」と、二十三年忌のことが記されてゐる（石井柏亭編『鵲湖及鼎湖』大正八年十二月、石井満吉）。文雄が逝いたのは明治四

年十一月十八日、明治二十四年が「二十三年忌（祭）」といふにはいさ、か疑問が残るものである。

・佐々木信綱『歌のしをり』（明治二十五年四月、博文館）「難題を

よむはあしき事」の項では、文雄の「黄金不多交不深」といふ題の一首「おもへたゞ世は山吹の花こゝろちらぬほどこそ人もとひくれ」(調鶴集・八六五)が「むつかしき題をよくよみかなへたる」例として紹介せられる。「黄金不多交不深」は、盛唐の詩人張謂の七絶「長安主人の壁に題す」の第二句。また、「歌の精神」の章では「歌よむやう」(伊勢の家つと 初編)が引用せられる。

・川上文彦編『新選普通帝國婦女用文』(明治二十五年六月、積文館)は、「寒夜読書」「古戦場」の二編の文章を収める。

・佐々木信綱「十日の旅(其二)」(少年学術共進会)三巻十号、明治二十五年十月、博文館)は、文雄の田園詠を「都の中にすまひながら、田家のさまを、うまく咏出られし歌、いと多し。」と評する。

・大和田建樹『和文学史』(明治二十五年十一月、博文館)に於ては、文雄と香川景樹とが並称せられる。すなはち「優美のものたるを失はしめざりしは。京の景樹江戸の文雄を起元とすべし。」と。

・さくらどのおきな「近世歌評」(うらにしき)一号、明治二十五年十一月、尚綱社)は、文雄の「みわたしの夕汐おつる沖つ洲に入日を残すささの一むら」(海辺鷺)を挙げ、二句を「夕汐おちし」と改めるのが良いと説く。その他、横山由清、弾琴緒、藤田孝之の歌に評が加へられる。孝之は藤尾景秀、佐々木弘綱門の歌人。

・山田久延彦「大八洲雜誌卷七十六の撰歌の事」(大八洲雜誌)卷之七十七、明治二十五年十一月、稽照館)では、同誌卷之七十六に

載る近江の中根清宏の一首「草まくら旅としいへは大かたのふるさと人も恋しきものを」(旅中恋)は文雄の歌と「一言半句もたがはず」、「翁の遺稿」(井上文雄翁家集)であらう。)や佐々木弘綱編『千代田歌集』に掲載せられてゐることが語られる(実際、『調鶴集』(六六五)に収録)。山田は続けて言ふ「中根氏よ宜しく井上翁の靈前にわひ言申されよ」と。中根清宏は、「大日本ノ古風ヲ永久ニ保存センガ為メ主ニ国風ヲ研究シ国語ノ進歩ヲ謀ル」(大八洲雜誌卷)卷之七十三(広告) 結社「幸言舎」(滋賀県高島郡川上村)の幹事。なほ、「前号ノ撰歌ニ出シ予ガ旅中恋歌ハ千代田歌集第一篇ニアル井上文雄氏ノ同題ノ歌ト偶然ニ衝突シタルヲ発見シタリ是全ク予ガ胸臆ヨリ吐露シタルモノニテ」と釈明するも、税所敦子の一首(千代田歌集 二編)所収)をも自詠として『自由新報』に掲載してゐたと指摘せられてゐる(大八洲雜誌)卷之七十七)。

・佐々木信綱の編にかゝる『標註七種百人一首』(明治二十六年一月、博文館)に収められる『近世百人一首』(信綱編)には、「惑はずばまことの道はしらじかし愚なるこそ嬉しかりけれ」が採られる。

・大和田建樹『応用歌学』(明治二十六年五月、博文館)「家集」の章、撰集よりも家集を尊重すべしといふ文雄の言に賛意を示し、時代ごとに見るべき家集を紹介する。徳川時代は契沖の『漫吟集』から『調鶴集』まで二十一冊を挙げてゐる。

・『歌文』初編第一号(明治二十六年九月、歌文会)は、文章「閑居記」を収録。

・大和田建樹『文学遊戯』（明治二十七年四月、博文館）「第三会連歌」の章に於て、「近來になりては」「調鶴集」に連歌が数多収録せられてゐることが指摘せられる。なほ、大橋又太郎編『内外遊戯法』（明治三十一年六月、博文館）にも同様の指摘がある。

・大和田建樹『新体日本歴史』（明治二十七年六月、博文館）では、徳川時代の歌人として、契沖、賀茂真淵、本居宣長、富士谷成章、香川景樹、文雄の六名を挙げる。

・武田信城編『親愛六々和歌集』（明治二十七年七月、竹乃舎）は、信城所蔵の短冊帖を一冊に翻字したもの。一名を「三百六拾人一首」とも言ふ。文雄は「いひしらぬ花の光はよるひかる玉といふとおよはさるへし」（梅花十二種の中光輝を）が掲載せられる。

・『文海』二巻六号（明治二十七年九月、同文会）は、『伊勢の家つと初編』より「俳諧歌」を取める。

・大和田建樹「文章の話」（『少年世界』二巻四号、明治二十九年二月、博文館）は、竹取物語、うつほ物語、伊勢物語、大和物語の註釈書を挙げ、「大和は井上文雄の『冠註大和物語』最も良きものなれども得がたきを如何せん。」と語る。

・内藤虎次郎（湖南）は、「景樹以後に在りて、異曲同工の歌才と称せらる」との評を与へた（『近世文学史論』明治三十年一月、政教社）。

・池谷一孝の講義録『日本文学史』（明治三十年十一月跋、東京専門学校）では、「幕末文化文政の交香川景樹、井上文雄等出で、名

手の聞こえ高かりしが想は古の質樸なるを採り詞は今の平易なるを尚ぶ風ありしより世靡然として之れに赴き以て歌界は又こゝに一新紀元を開くに至れり。」と景樹文雄を並称し、徳川時代の「著名なる歌人」として、細川幽齋、木下長嘯子、下河辺長流、契沖、荷田春満、有賀長伯、賀茂真淵、富士谷成章、小澤蘆庵、加藤千蔭、村田春海、清水浜臣、景樹、文雄を挙げる。池谷はその後、永井一孝の名で『国文学発達史』（大正五年²）、早稲田大学出版部）を著し、『調鶴集』を評して「気骨ある歌風である」と述べる。『国文学発達史』は八四〇頁本、六四六頁本の二種類が刊行せられてゐるが『調鶴集』に関しては同じ記述である。

・八洲力士『かとりみやげ総武成田鉄道名所案内』（明治三十一年五月、朝野利兵衛）に、「西京の稲荷山の初午をよまれたる歌」として引かれる文雄の一首「人毎にかひえてかへる埴鈴は思ふ事なる験なりけり」は出典未詳。

・明治三十一年十月十八日には、松の門三紳子主催のもと二十七年祭が行はれてゐる（『明治歌林』一〇八集（明治三十一年十月、椎本吟社）「雑報」）。橋道守、相澤朮の詠を見出し得たので、その二首を引く。

橋道守「橋道守家集」（橋壽子編、明治三十七年四月、椎本吟社）
井上文雄主か二十七年祭に寄書懐旧を

たましひはふみの林にとまららむ歌よむことに面影そたつ
相澤朮「雪の舎集」（明治三十七年九月、相澤英二郎編刊）

井上文雄翁二十七祭に寄文懐旧を

空さへもかきくもりけり文の道ふみわけたりし昔しのへは

・ 的場鉦之助編『婦女の玉章』(明治三十一年十二月、尚文堂)は、文章「寒夜読書」を収める。

・ 鈴木忠孝編『高等女子文範 三の巻』(明治三十二年三月、興文社)は、「暁擣衣」「閑居」「古戰場」「玉」を「調鶴集」より収める。

・ 内田鉄三郎編『名家文話』(明治三十二年五月、鉄華書院)所収「佐々木信綱大歌話」は、明治三十一年十月二十二日に行はれた談話の筆記。信綱は、「故人に井上文雄と云ふ歌人がをりました。

此人は余程の大家として見上げて宜しう御座いますが、まだ世間では一向存じませぬ、どうも気の毒ぢやあ御座いませぬか、昨日も追悼祭を行いました処が、会合した人数が、漸く二十名ばかりでした、……是れ全く名人の割合に、世人が知らぬゆゑで有ります」と述べ、文雄の小伝及び詠草を掲げる。忌日を「明治四年十一月八日」、辞世を「老果て、命惜しとは、思はねど、死なむと云へば、かなしかりけり、」と記すも、それ／＼正しくは「十一月十八日」、第四句「死ぬとしいへば」である。

・ 岡野英太郎編『普通作文例題』(明治三十二年十二月、松栄堂)は、「惜花」「竹」を収める。

・ 大和田建樹『日本大文学史』(明治三十三年一月、博文館)「第七十五章 著名の作者」中「井上文雄」の項では、「新体をよみ出だしぬ」の評。

・ 中川愛水編『日本の美文』(明治三十三年五月、浜本明昇堂)は、「旧都」を収める。

・ 小林杖吉編『美文英華』(明治三十三年六月、又間精華堂)は、「寒夜読書」を収める。

・ 福井淳編『新撰中等国文軌範』(明治三十三年十二月、積善館)は、「竹」「古戰場」を収める。

・ 松雲堂編輯所編『中等教育模範国文』(明治三十四年二月、石塚猪男蔵)は「長歌論」を収める。

・ 文雄の一首「朝夕に手鞠そ、くる外ぞなきうなるはなりが春の設けは」(調鶴集・五一五)に就て、大和田建樹『歌まなび』(明治三十四年四月、博文館)は、「これも手鞠の言葉まへに例なければ」とも。優美にして他の言葉との調和きはめてよろしければ。誰かは非難するものあらん。」と称讃してゐる。

・ 侃々学人「明治物故の歌人」(『こ、ろの華』五卷五号、明治三十五年五月、竹柏会出版部)は、文雄をはじめ八田知紀、加藤千浪、近藤芳樹、横山由清、伊東祐命、間島冬道、弁玉、鈴木重嶺、税所敦子、行誠、伊達千広の逸話を語つた文章。文雄を「おもしろい人物」と評し、文雄の家の台所には常に菰冠が置いてあり、誰でも勝手に飲めといふ風で、医者臭いところはなかつた、と語られる。また、「近頃王朝時代の事物をよむ事が流行するやうであるが、此嚆矢は文雄というてもよいのである。」とも述べてゐる。

・ 明治書院編輯部編『高等女子読本 卷八』(明治三十五年十月、

明治書院)は、「古戦場を弔ふ文」を収める。

・友田宣剛『軍人教育作文教程 卷三』(明治三十五年十二月、光融館)は「悲哀ノ情ヲ表ハス文」の文例として「古戦場」を収める。

・竹柏生「残月樓手抄(一)」「こゝろの華」六巻一号、明治三十六年一月、竹柏会出版部)中、「柯堂の歌話」の節に於て、文雄が門人安斎保美に宛てた書翰が紹介せられる。「天曆より長保寛弘の頃迄の上手の家集を心と致し申候。」など文雄が自らの和歌観を語つてゐるものである。

・斎藤由松編『標註教育和歌集』(明治三十六年三月、文港堂)は、「わが国をいひおとしつゝ、異かたの心たくみをほめていひたる」を引く(『調鶴集』未収録)。

・徳島藩士の歌人岩田文蔵(允真)の著した『和歌心の姿見・和歌疵見の鏡』(明治三十六年九月、白虎堂活版処)には、岩田の友人である歌人川田(河田)秀穎の「故井上文雄などは、俗調をよむ人にてあり。」といふ言が紹介せられる。

・今泉定助講述「作文」(『女学講義 第四回後期第十一卷』明治三十七年十月、大日本女学会)は「古戦場」を引く。

・栗原保次郎、遠山操『やまと桜』(明治三十八年二月、厚生堂)は、「かへらじな香ばしき名を伝へずは夷が国に首はひゆとも」の

一首(『調鶴集』未収録)に歌意を記し、文雄の略伝を述べる。

・福井淳『新選美文中学国文資料』(明治三十八年三月、積善館)は、「竹」「古戦場」を収める。

・「見聞抄録」(『書道』三十八号、明治三十八年五月、大日本選書奨励会)に語られる「井上文雄歌に妙を得たり」は、「ものゝふの、入りこむ宿は何もなし、こがねのぜにの花はさげども」の歌によつて賊を退けた話。

・「他山の石」(『こゝろの華』九巻五号、明治三十八年五月、竹柏会出版部)は、「和歌発展の由来」の節で、文雄は「之(註：『諷歌新聞』による逮捕)が為め病を得て明治四年に歿し」たと記される。

・智葉女史「陣中の友」(明治三十八年六月、中外図書局)は、盛唐の詩人張謂「長安主人の壁に題す」の第二句「黄金不多交不深」を題に詠んだ一首「思へたゞ世は山吹の花心ちらぬほどこそ人も訪ひくれ」に就て、「唐詩選の一句をかくうつくしく、よみ出でたる、まことにめでたし。」と述べる。

・宮脇郁編『女子作文歌辞典』(明治三十九年四月、参文舎、積文社)は、作例として「閑居記」「竹をうゝる詞」を収める。

・内海弘蔵『読書作文辞典』(明治三十九年五月、宝文館)の文雄の項「通称二真」は「元真」の誤植。

・関根正直編『文範筆のあや』(明治三十九年六月、大倉書店)は、「古戦場を弔ふ」を収める。

・三田村熊之介編『細評叙情美文』(明治三十九年六月、石塚猪男蔵)も「古戦場」を収録する。

・内山正如編『中等学生作文宝鑑』(明治三十九年八月、博文館)は、「かくれ里の序」を収める。『かくれ里』は、井上淑蔭の著作。

・鈴木貞次郎『中等作文模範』(明治三十九年十月、神原文盛堂)
も、「かくれ里の序」を収める。

・中川愛水編『統美文規範』(明治四十年三月、藤谷崇文館)は、
「旧都」を収める。

・小宮水心『美的三体記事文』(明治四十年八月、岡本偉業館)は、
「惜花」「晝擣衣」「古戦場」「旧都」「閑居」「竹」「玉」の七編を収
録する。

・諸家の辞世を纏めた、大澤素行編『名家遺詠録』(明治四十年十
月、昇龍堂)にも文雄は立項せられるもの、辞世(第四句「死ぬ
ると云へば」)、忌日(明治四十年十一月八日)に誤りがある。

・芳賀矢一編『国文学歴代選』(明治四十一年二月、文会堂)は、
『調鶴集』より十三首を収める。

・松村政親『実用作文独修書』(明治四十一年四月、博文館)は、
「古戦場」に解説を附す。

・鳥野幸次「子日遊について(完)」(『國學院雜誌』十四卷七号、
明治四十一年七月、國學院大學)は、末尾に文雄の文章「子日興」
を掲げる。

・長連恆『日本語学史 下巻』(明治四十一年十二月、博文館)は、
『伊勢の家つと』全三編の総目次を示す。「第一編には天保五年の自
序あり。」と記されるも不審。自序に年紀の記載はない。

・木村正辞「作歌に就きて」(『わか竹』二卷二号、明治四十二年二
月、大日本歌道奨励会)は、学問と詠歌の関係に就て論じ、文雄は

学問をするに歌が出来なくなると言つて、弟子には学問を勧めなかつたと記す。また、文雄は人の歌を褒めるのが得意で、添削にも妙であつたことが語られる。なほ、宣長に就ては「学者です、詠歌には巧みではなかつたやうです」と言ふ。

・『集古会誌』戊辰卷四(明治四十二年三月、集古会)所収、「蔵書印譜 其二十八」には井上文雄の蔵書印として何故か「水戸青山氏蔵」の印影が掲げられる。「水戸青山氏蔵」は水戸藩儒青山拙斎(延子)の蔵書印である。

・金子薫園は、祖父が文雄の和歌を好んでゐたことを語る(中村武羅夫『現代文士二十八人』明治四十二年七月、日高有倫堂)。それゆゑ、薫園は文雄の和歌に親しんでゐたのであらう。

・芳賀矢一『月雪花』(明治四十二年九月、文会堂)では、「桜の花を日本の精神として歌つた」和歌として真淵、宣長に続いて文雄の「いさぎよき大和心を心にてよそには咲かぬ花桜かな」を挙げる。

・武川寿輔編『軍人精神修養訓』(明治四十二年十一月、軍需商会出版部)には、「かへらしな香はしき名を伝へすは夷か国に首はひゆとも」の一首が引かれる。

・井上通泰「医師と歌人」(『医海時報』八一号、明治四十三年一月、医海時報社)は、医師にして歌人であつた清水浜臣と文雄とを比較した論。浜臣を考証家、文雄を創作家と称し、「歌に於ては文雄の方が遙かに勝つてゐる」と述べる。

・荻の里人「明治の歌日記(一)」(『わか竹』三卷二号、明治四十三年

年二月、大日本歌道奨励会) は、橘曙覧、文雄、八田知紀、大田垣蓮月、近藤芳樹、高島式部、飯田年平に就て論ずる。文雄の家集尊重の言を良しとしてゐる。

・北川博愛編『高等作文教範』(明治四十三年十月、求光閣書店)には、「古戦場を弔ふ文」が収められる。

・宮脇義臣『美文詠歌大成』(明治四十四年一月、松雲堂) ↓ 『歌まなび』昭和三年六月、前田文進堂) は、「閑居記」「竹をうゝる詞」の二編の文章を収める。

・某大家談「歌に法あり」(『わか竹』四卷二号、明治四十四年二月、大日本歌道奨励会) では、「関東の歌をみだしたものは本間游清、井上文雄、及び加藤千波の三人であ」り、「俗臭紛々たる卑しい歌人」と非難する。この三人のせるで「残念ながら江戸の歌は台なしになり終に雄大遒勁なる真淵一派の歌風は地を払つて其の隻影だも認むることは出来なくなつて仕舞つた」と言ふ。そして、文雄門の弘綱も亦扱き下ろされる。

・服部躬治編『春夏秋冬名歌選』(明治四十四年五月、成美堂) は、萬葉から明治初期迄の歌人二百五十人の詠一千九百九十五首を収録する。文雄は五十三首の多きを教へる。

・久良岐「詩人と絵画」(『川柳獅子頭』三卷八号、明治四十四年八月、獅子頭発行所) は、「歌人には画は余りやらぬけれど、……井上文雄、八田知紀なども素人通であるが一寸面白い」と言ふ。

・坪内孝、横田市一編『作文大観』(明治四十四年十二月、千代田

書房) は「雄健の例」に「古戦場」を収録。

・佐佐木信綱『和歌入門』(明治四十五年一月、博文館) は、「近世のすぐれた歌人井上文雄は、撰集は礼装の人の如し、家集は平服の人の如しといつて、後者の自由自然なのを喜んだが、いかにもその通りである。」と言ふ。

・芳賀矢一、杉谷代水編『作文講話及文範』(明治四十五年三月、富山房) の下巻は、「記叙論説以下各種文章の軌範たるべきものを列挙し」(例言) た文範。文雄は「古戦場」が採られる。

・横山健堂『趣味』(明治四十五年三月、実業之日本社) 「背景の富士」の章では、「箱根案内」といふ「弘化の末年ごろに出版されし……文人風の粗画に、此の溪山を紹介して新機軸を出だす。」といふ一書を紹介する。そして「此の書には、当代の流行児を七湯に配当して画く、……宮の下に、井上文雄の坊主頭が坂を登りゆく姿、とりぐに面白ろし。」と記すのであるが、『箱根案内』は現存未詳。

・榎本秋村編『各種文体自在文章宝鑑』(明治四十五年五月、実業之日本社) も亦、「古戦場を弔ふ記」を引く。

・岡崎桂一郎「国学者たる医家の略伝(承前)」(『刀圭新報』三卷十一号、明治四十五年七月、刀圭新報社) は、井上文雄、権田直助を採り上げる。伝記は『古学小伝』等の記事を典故としてゐる。

・杉原夷山、加藤樸堂編『日本書画人名辞書続編 上巻』(明治四十五年七月、松山堂) ↓ 改修大正十五年一月、松雲堂書店) は、

「文雄」として立項。「十一月十七日歿」は、十八日が正しい。

二、大正期

・国語調査委員会編『疑問仮名遣 前編』（大正元年九月、国定教科書共同販売所）には、「あわあわし・あわつけし・あわつかに」「いもい」「おうなおうな（随分）」「おかす（犯）」「おしね」「おばすてやま（娘捨山）」「そえに（故）」「たいだいし」「ほうぞく」「みずわぐむ」「もちいる（用）」の項に文雄の説（『伊勢の家つと』『冠註大和物語』）が引かれる。

・詩酒狂客編『才士才媛論文小品』（大正元年十一月、前田文進堂）は、文章一編「長歌の論」を取める。

・集文館編『文例類句文章大辞典』（大正二年二月、集文館）は、文章「竹」を引く。

・国語教授研究会編『能文自在作文辞典及文範』（大正二年五月、三友堂書店）は、「閑居の記」を取める。

・吉丸一昌『新撰作歌法』（大正二年十月、敬文館）は、「歌の分類と形式」「短歌の構想」の作例として、『調鶴集』より七首を掲げる。

・兵事雑誌社編輯局編『幹部用精神教育訓言録』（大正二年十一月、兵事雑誌社）は、将校下士官のための精神教育を目的とした書籍。文雄は「かへらしな香はしき名を伝へずば夷か国に首はひゆとも」の一首が引かれる。

・甫守謹吾編『現代名文集』（大正二年十二月、益友社）も「竹」を引く。

・『筆之友』一六七号（大正三年四月、書道奨励協会）巻頭には、「名家短冊十四首」（景樹、知紀、文雄、蓮月、隆正、芳樹、穎則、弘綱、信綱、豊穎、清直、安房、詮、親愛）が写真版で掲載せられる。文雄の短冊は「異国にしめす 今も猶神世なからに成るなりやまとことの葉山さくら花」。

・文学に関する読者の問ひに対して簡にして要を得た回答を示す「応問」（『國學院雑誌』二十一巻七号、大正四年七月）に於ては、「高等国文（宮脇義臣編）に見えたる「つれつれのあそびがたきにたのむには草木の中の人ぞよろしき」といふ歌の意及び作者の小伝御教示を乞ふ」といふ問ひに対し、「草木の中の人とは茶の事」とその解釈を示し、作者である文雄の略伝が語られる。

・内ヶ崎作三郎『人生日訓』（大正四年十月、大日本図書）「七月十九日 早起」の項で「星影につかへし道を踏みかへて今朝も雀に起されにけり」（調鶴集・七七六）が引かれる。

・村上浪六『今昔の感』（放言録）大正四年十一月、至誠堂書店↓『浪六全集 第二十六編』大正十五年九月、至誠堂書店）では、『諷歌新聞』の詠「あはれ君かきこもります此うへの世の中いかになりか行くらむ」が紹介せられる。

・与謝野晶子『歌の作りやう』（大正四年十二月、金尾文淵堂↓『定本与謝野晶子全集 第十三巻』昭和十五年四月、講談社）、「著想

に就いて(二)の節では、文雄の歌論を「当時の新派」と位置づけるのであるが、和歌に就ては「駄作が多い」と述べる。

・芳賀矢一編『学生の友』(大正五年一月、広文堂書店)には、文雄の詠二首が収録せられる。

・萩原正夫編『伊豆の海 一名伊豆名所集』(大正五年一月、誠之堂書店)には、一首入集(箱根山)。

・花笠道二「大正名家評判記(承前)」(『筆之友』一九三三号、大正五年六月、書道奨励協会)「山内香溪先生」の節に於て、会津藩士たる香溪が幽獄にあつた時、文雄御牧等同室の文人達から詩歌を贈られ、後に記念とすべく装潢したと記す。『筆之友』次号(一九四号、大正五年七月)には、その写真版が掲載せられる。

・平渡緒川編『書画鑑定法別冊』(大正五年七月、書画研究会)は、文雄晩年の署名(縦長の「文」、花押風の「雄」³)が影印で採録せられる。

・清話会編『佐川案内記』(大正五年十月、清話会)は、高知県高岡郡佐川町の観光案内。青源寺の境内には、文雄の撰文による「名鶯の碑」があり、末尾に「花園の名残はかなき今よりは春のかたみに何を聞かまし」の一首が存すると云ふ。

・井上桂『文学趣味養成論』(大正六年四月、興文館)は、様々な和歌俳句を引き「国文学の趣味の奥底に触れる」(序)べく執筆せられた。「聯想の質」「桃」「燕子花」「五月雨」「夕立」「薄(尾花)」「紅葉」「時雨」「松」「竹」の節で文雄の和歌も引かれ、論が展開せ

られる。

・斎藤茂吉は、「かつて井上文雄の『秋またぬ籬の草の一本にうつくしよしと蟬の鳴くなる』といふ歌を読んだとき此蟬は、オウシンツクツクの事だとは思つたが、『うつくしよし』とは旨い事を云つたものであると感心したのであつた。」(『金槐集私鈔補遺』『短歌私鈔』続)大正六年四月、岩波書店↓『金槐集私鈔』大正十五年五月、春陽堂。『斎藤茂吉全集 第九卷』昭和四十八年十二月、岩波書店)と語る。「秋またぬ」の歌は森田義郎編『調鶴集抄』(『国歌』三十号、明治四十二年一月附録)所収。なほ、茂吉は「予も氏(註：森田義郎)から氏の編輯に繋る『調鶴集抄』を借りて一読した。」と森田

から「調鶴集抄」を借りたことを記してゐる(『井上文雄の和歌』『童馬漫語』大正八年八月、春陽堂)。

・『筆之友』二〇五号(大正六年六月、書道奨励協会)巻頭には、飯盛山に存する「思ひ出の記」碑拓本の写真版が掲載せられる。「思ひ出の記」碑は、会津藩士山内昇(香溪)が明治元年に逮捕、糺問所に拘禁せられた折、同室であつた文雄、広澤安任等の文人が合作して香溪に贈つた一幅を刻したものである。

・大森富次郎編『家庭訓』(大正六年十二月、山崎美風堂)は、文章「古戦場」を収める。

・萬葉から幕末期迄の新年の歌を紹介する、佐佐木信綱「新年と古人の歌」(『雄弁』九卷一号、大正七年一月、大日本雄弁会講談社)では、末尾に文雄の「人心くだりのみゆく世の中を神代にかへせ春

の初風」が引かれ、「尋常の初春の歌以外に気概のあるところ、作者の人となり忍ばれて面白い。」と結ばれる。

・小宮水心『美的三体記事文』(大正七年五月、岡三書房)には、『調鶴集』より「惜花」「暁擣衣」「古戦場」「旧都」「閑居」「竹」「玉」七編の文章が収められる。

・光藤泰次郎『受験参考国語精解』(大正七年五月、光世館書店)は、「古戦場」を収める。

・萩野由之は、「歌人の短冊を集める人に」(『史話と文話』大正七年六月、博文館)に於て、黒川春村の短冊は少なく、文雄は多いと述べる。

・瀬川光行編『明治大正書画大観』(大正七年十二月、書画大観刊行会)は、写真版で「明治及び大正の年代に著はれたる名公鉅匠の墨蹟を結集」(凡例)した全四冊(天地玄黄)の大冊。文雄は大口鯛二所蔵の色紙「あるあした 雪さそふ朝きたあれて梅もときこほる、庭にひえ鳥のなく」が掲載せられる(天の巻)。

・東京美術刊行会編『和漢美術鑑定全書 和漢落款印譜之部下』(大正八年八月、東京美術刊行会)にも、文雄の晩年の署名(縦長の「文」、花押風の「雄」)が影印で取められる。

・三諸「近代短歌批評(二)」(『わか竹』十二卷九号、大正八年九月、大日本歌道奨励会)は、文雄を「叙景の技術に長じて、才子風の歌を詠む人」と称するも、「屢軽薄読むに耐へざるものがある。」とも記す。「檀が花露とこぼれて小雨ふる森の下路夏めきにけり」

(調鶴集・一四二)を評して、「之(註：檀の花)を小雨に配合して首夏の心持を活躍させたのは、全く作者の手柄である。」と言ふ。

・二段式参考書刊行会編『二段式参考書標準国語新解釈法』(大正八年十一月、二松堂書店)も亦「古戦場」を収める。

・三諸「近代短歌批評(五)」(『わか竹』十三卷一号、大正九年一月、大日本歌道奨励会)では、文雄の歌三首(調鶴集・四二、千船集二篇、千船集三篇)に批評を加へる。「傑作」「才人の歌」など好意的な言辞である。

・同「近代短歌批評(六)」(『わか竹』十三卷二号、大正九年二月、大日本歌道奨励会)は、文雄の一首「枝かはず花はをとめ子枝青柳はすこしねびたる女なりけり」(調鶴集・九〇・桜柳交枝)に就て、芭蕉の句「梅柳さそ若衆かな女かな」を引き延ばし写真のやうに三十一文字にしたものである、と説く。

・若竹子「辞世の歌」(『わか竹』十三卷九号、大正九年九月、大日本歌道奨励会)では、文雄の辞世も紹介せられるも、第四句「死ぬとおもへは」と誤りがある。

・関根正直「明治元年の東京」(『史話俗談』大正九年十一月、国民図書)は、『諷歌新聞』の一件を採り上げる。

・金子彦二郎『死生の境に發揮せられたる日本国民性』(大正十一年六月、東京宝文館)「第三章 無事平穩な臨終に於て表はれたる国民性」では、文雄の辞世「老い果てん命惜しとは思はねど、死ぬと思へば悲しかりけり」(正しくは「老果てて命惜しとは思はねど死

ぬとしいへばかなしかりけり」が三代目中村歌右衛門の辞世「嗚呼名残惜しや此の世の別れ道、妙法蓮華けふの旅立。」とともに紹介せられる。

・斎藤次郎八編『修養訓蒙勤の道』（大正十二年一月、斎藤次郎八）は、「古今東西に於ける聖賢君子、名士大家の金言玉章」を主題毎に纏めたもの。文雄は四首採録せられる。

・高山直通『高等諸学校受験準備国文精解』（大正十二年二月、明治図書）は、「古戦場」を収録。「古戦場」は明治四十一年高等学校（総合選抜制）、明治四十二年東京女子高等師範学校の入学試験に出題せられた。

・高木武『最新国文解釈の研究』（大正十二年六月、修文館）は高等学校受験参考書。「あなあはれ」「戦のにはに」の二編が『井上文雄翁家集』（「古戦場をとぶらふ詞」）より収録せられる。二編ではあるが、正確には「古戦場をとぶらふ詞」を前半部、後半部に分けたものである。

・天友堂主人「短冊蒐集の趣味（一）」（『日本乃関門』一卷三号、大正十二年六月、日本乃関門社）に語られる「書名は失念したが井上文雄が集めて白川の某神社へ奉納した短冊百葉の模刻本」とあるは、長瀬文豊編『関屋のはしら』（雁のはしら、長柄のはしら）のことであらう。

・上田秋成の仮名遣書『靈語通』を論じた、岩橋小彌太「靈語通論（一）」（『藝文』十四卷八号、大正十二年八月、京都文学会）では、

「幕末の歌人で奇麗な歌を詠むので名高い井上文雄が仮名一新を著して此の書を祖述してゐるといふのは甚だ意外である。」と記される。文雄の著作、正確には「仮字一新」。

・鈴木敏也編『江戸文学選集』（大正十三年二月、中文館書店）には、「調鶴集」より二首及び獄中詠一首収録。

・坂井衡平『日本歌謡史講話』（大正十三年九月、誠之堂書店）は、「春海門には井上文雄が後拾遺風を説いて専ら景樹に対して詠歌上から対抗した。」と、「桂園派の反動」を語る。

・佐佐木信綱の講演「和歌と桜」（東京放送局編『ラヂオ講演集 第一輯』大正十四年十一月、博文館）は、その冒頭に於て真淵、文雄の桜を詠んだ歌を挙げる。

・前島徳太郎編『日本作者辞典』（大正十四年十二月、文省社）、『井上文雄』項あり。「岸木、由豆流」と誤植がある。

・斎藤茂吉「明治和歌革新運動の序幕に至る迄の考察」（『中央公論』四十一卷一号、大正十五年一月、中央公論社）『斎藤茂吉全集 第二十一卷』昭和四十八年八月、岩波書店）は、平賀元義、橘曙覧、大隈言道、文雄、八田知紀、僧弁玉、丸山作楽、僧愚庵、福本日南、僧礼敬、海上胤平、落合直文に就て論じ、文雄の歌風を「軽妙」と評する。

・鳥野幸次「四季の趣味」（大正十五年一月、文友社）は、四季折々の景物を和歌俳諧を引きつ、述べたもの。文雄は杜若、蚊、桔梗、月、雁、水仙を詠じた六首が採り上げられる。

・鈴木敏也は、「概観日本文学史潮」（大正十五年三月、中文館書店）『概説日本文学史潮』昭和四年四月、中文館書店）に於て、「調鶴集」に現はれた感じは優雅にして寛闊なる趣がある。」と述べる。
 ・佐佐木信綱「明治初年の歌」（『心の花』三十巻八号、大正十五年八月、竹柏会）では、「中外新聞」九号より文雄の一首を紹介する。

三、昭和期（昭和二十年迄）

・三浦圭三『日本文学辞典』（昭和三年二月、文教書院）は「あやを」と誤読するも、簡にして要を得た略伝。引用歌七首のうち、「名をとへば知らずと云ひて椎拾ふめざしいつくし誰が子なるらん」「賤が屋のむくげゆひませし竹垣に目白さへづる秋の初風」「夏の日はいつとも長居の客人をかへして後もなほ長くして」は『調鶴集』未収録。

・新町徳之編『近世文学選』（昭和三年五月、内外出版印刷）は、文雄の和歌十首を『調鶴集』から引く。
 ・奥里将建『最新国文学辞典』（昭和三年九月、大同館書店）は「井上文雄」として立項。

・中島利一郎は、「和歌にあらはれたる明治維新」（文明協会編『明治戊辰』昭和三年十一月、文明協会）に於て「江戸の歌人井上文雄」の節を設け、「江戸期の最後を飾つた歌人」と評し、「文雄の歌は才を縦に奇を弄するに過ぎたものもあるが、又捨てがたい一種の

風格を備へてゐる。」と説く。また『諷歌新聞』に就ても触れ、「一種の気概ある江戸つ子肌の歌人たる面目を茲に發揮してゐる。」と述べる。

・飛田年尾「国語仮名遣問題について」（『南滿教育』昭和三年十一月号、南滿州教育会）では、「仮名は心のまゝに書け」といふ「仮字一新」が紹介せられる。

・鴻巣盛広、次田潤、栗原武一郎編『歴代国文学選』（昭和四年二月、裳華房）は、文雄の和歌六首を収録する。

・浅間神社社務所編『富士の研究Ⅳ』（昭和四年三月、古今書院）「富士の文学」編第二章「和歌」に於て、文雄の富士山を詠んだ歌二首が引かれる。

・澤式「医家と趣味（十七）」（『日本医事新報』三六一号、昭和四年七月、日本医事新報社）に於ては、文雄の家集『調鶴集』が紹介せられ、文雄の家として傍にあつた井戸が震災後の区画整理で判らなくなつてしまひ、「元真住居の蹟は偲ぼうにも由なくなつたことは言を要すまい。惜しいやうな気がする。……それを何んとかして、一片の石でも宜い、先哲旧居の跡、千古猶ほ判るやう、其区其区の同業者が骨を折つて呉られる訳にはゆかんものであらうか。」と語られる。

・中山久四郎『東洋史講座 第五卷』（昭和五年四月、雄山閣）「第十三章 南宋と金との和戦及び南宋の末路」に於ては、中国南宋の武將岳飛を詠んだ文雄の二首「君が背にしるしおきけん一言をたれ

も心にきざむべきかな」「から人がせなかにゑりし四の文字誰も心にきざめとぞ思ふ」が紹介せられる。「から人が」は『調鶴集』所収（八三七）。

・高安月郊『日本文芸近代史』（昭和五年六月、早稲田大学出版部）「最後の歌人」の章では文雄、諸平、言道、曙覧、元義に就て語られる。曰く「江戸では春海の系を引いた井上文雄（玄真、柯堂又歌堂、調鶴）が古典的の情景を繊細に述べた。」と。

・金井紫雲『樹木と芸術』（昭和五年九月、芸艸堂）には、粟を詠んだ文雄の一首（一九四）が『調鶴集』より引かれる。

・堀田璋左右編『国史新辞典』（昭和六年四月、雄山閣）には、「井上文雄」として立項せられる。

・小林雲山編『古今日本書画名家全伝』（昭和六年五月、二松堂）は、簡略な伝記を記すのみ。師岸本由豆流が誤植のため「岸本豊流」と記される。

・竹岡友三編『医家人名辞書』（昭和六年九月、竹岡友三）は、文雄の項で『統江戸名家墓所一覽』の記事を引く。嵯峨正作編『大日本人名辞書』（明治十九年四月、経済雜誌社）の文雄の項に典故として掲げられる『統江戸墓所一覽』と同一の書であらうが不詳。

・別所梅之助の随筆集『石を積む』（昭和六年九月、警醒社）は、『初夢』「冬の小鳥」の章で文雄の詠を引く。

・土田杏村『日本歌論史』（山本三生編『短歌講座 第一巻』昭和六年十月、改造社）は、「江戸末期」の「注意すべき歌人」として、

前田利保、文雄、大隈言道を挙げる。文雄を評して「気概颯爽たる歌人であつて、当時の歌の平弱な風にあきたらず、「気概の歌」を主張した。」と言ふ。

・神谷敏夫『最新日本著作辞典』（昭和六年十二月、大同館書店）、「井上文雄」として立項せられ、「景樹以後の名匠」の評。

・斎藤勇『諷歌新聞と井上文雄』（『霸王樹』十四卷四号、昭和七年四月、霸王樹社）は、西村天囚、磯野秋渚編『今古歌話』、清宮秀堅『古学小伝』、宮武外骨『すきなみち 第一編』の記事を参考に『諷歌新聞』の概要を解説し、「旧い権力に対する恋々たる愛着、之を覆す新勢力に対する憎悪の爆発」が筆禍事件を引き起したと述べる。

・高田竹山、高林五峰の対談「書画会を中心に」（『書道』一卷五号、昭和七年五月、泰東書道院出版部）では、五峰が文雄を「亡父〔註：高林二峰〕の歌の方の先生であつた」と言ひ、二峰が『諷歌新聞』発刊に尽力したとも語つてゐる。

・石泉要編『詳解近世名家文選』（昭和七年九月、芳文堂）は、『調鶴集』より「耳にさしてあてたらんやう」「世の中しづかに」の二篇を収める。『調鶴集』では、それぞれ「暮秋掃衣といへることを題にて」「向爐火文」の題である。「耳にさしてあてたらんやう」の末尾に「鶉の音に起き出でて賤が打つ衣あかつき寒き槌のとのする」の一首があるが、『調鶴集』には未収録。

・昭和七年十月に創刊せられた『日本短歌』（一卷一号、日本短歌

社) 所収「十月の歌暦(近代)」には、「十七日(明四) 井上文雄歿す」とあるが、文雄の逝いたのは、明治四年十一月十八日のことである。

・富田文雄編『青年愛吟集』(昭和七年十一月、愛知県安城農林学校校友会)「第十八章 田園風詠」では『調鶴集』より一首(二九四)が引用せられる。

・野崎敬翁『少年少女和歌の学び方と作り方』(昭和八年二月、博文館)には、詠作の手本として文雄の歌四首(霞、つ、じ、夏の日、野分)が挙げられ、解説が附される。

・江崎政忠編『皇陵巡拝案内記』(昭和八年三月、皇陵巡拝会)には、「淀川」「鳴門崎」を詠じた二首が『調鶴集』より引かれる。

・藤井乙男校註『江戸文学新選』(昭和八年三月、大倉広文堂)は、『調鶴集』より三首を収める。

・峯岸義秋『歌論史概説』(昭和八年三月、春陽堂)は、文雄の歌論を「写實的傾向を重んじた」と説く。

・斎藤茂吉『新選秀歌百首』(昭和八年五月、改造社〔改造文庫〕↓改版昭和二十四年三月、白玉書房。『斎藤茂吉全集 第二十二巻』昭和四十八年九月、岩波書店)は、「すみだがは中州をこゆる潮先に霞ながれて春雨の降る」を採る。

・「佐佐木博士にものを聞く座談会」(『短歌研究』二巻七号、昭和八年七月、改造社)に於て、信綱は、徳川末期から明治時代迄で好きな歌人として曙覧、言道、文雄の三名を挙げ、文雄を「気概のあ

った歌人」と評して、父弘綱が文雄門であつたことから自らも「知らず識らず文雄の思想の影響を受けたのかと近頃思つてゐます。」と言ふ。

・下村関路編『国歌世々の真玉』(昭和八年七月、團圓會)は、文雄の詠八首を収める。編者下村関路は、加藤千浪門の歌人笹村良昌に師事してゐる。

・会津戊辰戦史編纂會編『会津戊辰戦史』(昭和八年八月、会津戊辰戦史編纂會)に引かれる「囚中書画帖」の詩歌は、文雄、草野御牧が『諷歌新聞』発刊の廉により糺問局に捕へられた際、同室であつた寛王院義観、広澤安任らと詠んだものである。『調鶴集 一編』(天理大学附属天理図書館)に収められる獄中詠に漏れてゐるものを紹介する。

徳川の濁りそ、きて会津川いさきよき名そ世に流れける
 (二に名を流しけり)とはやくよみおきけるをとかくいふ
 人やありけんかの国をひくとて刑法官にめされければ

言の葉のかのみちのくにかへりとさいなまるへく思ひかけきや
 不二山の画をかきて
 日の本にならふ山なき不二のねの高き心にわか世つくさむ
 ひとやの中に寝さめて

冬の夜のしらみゆく空まぢわたる人屋の寝さめ堪へすもある哉
 ・相原弘『明治和歌史序説』(『日本文学聯講 第五巻』昭和八年九月、中興館)は、「岸本由豆流系統の歌人」の節で、文雄と千浪を

採り上げ、「当時の桂園派以外に清新の境地を開いた。」と述べる。

・森敬三「近世歌壇と刀圭家」（『短歌研究』二卷九号、昭和八年九月、改造社）は、医家にして歌人であつた人物を論ずる。中でも「秋成、文雄の二人は共にその稜々たる奇骨の反映ともいふ可き歌と、その天賦の歌才とに依つて、近世和歌史上他人の追隨を許さぬものがある。」と秋成、文雄を絶讃してゐる。

・金井紫雲「蔬果と芸術」（昭和八年十二月、芸艸堂）には、胡桃を詠んだ文雄の一首（二九八）が『調鶴集』より引かれる。

・篠田隆治編『近世国学者論文抄』（昭和九年一月、春陽堂）「平田鏡胤」の章の末尾に、文雄の歌が四首引かれるが『調鶴集』所収歌は一首のみ。

・森敬三編『近世名歌選』（昭和九年一月、書肆積文館）は、「近世における著名なる歌人四十人の秀歌を各十首づつ採録し」たもので、文雄の詠も収められる。「日本のやまと心のあらいそにくだけてかへる沖つしらなみ」のみ『調鶴集』未収録。

・吉田書店出版部編輯所編『自学自習記入式参考書国文解釈』（昭和九年四月、吉田書店出版部）は、『井上文雄翁家集』より「古戦場」を収める。

・藤廼舍鶴峰編『古今和歌評釈辞典』（昭和九年五月、東光書院）は、「歌のために獄に投ぜらるる」の題のもと『諷歌新聞』所収の一首を引く。

・山本三生編『日本文学講座 第六卷』（昭和九年五月、改造社）

では、「彼（註：文雄）はその歌才に於て群を抜くものがあつたのではなく、彼独特の歌論をもち且つ江戸つ子気分の濃厚な人であつたから、その歌は当時の平凡な類型的な歌壇に於ては破天荒なものであつた。」（森敬三「近世の和歌」）、「新風（註：子規をはじめとした新派）建設に作用した古歌を挙げてみると、第一に萬葉集がある。……第二に新風建設に作用したものは、……就中、橘曙覧の影響は全般的で最も大きい。次に井上文雄が影響してをる。」（小島吉雄「明治時代の和歌」と述べられる。

・前島徳太郎「古今作者考」（昭和九年六月、巧人社）には「井上文雄」として立項せられる。「いかならんたえて桜のなしと聞く唐土人の春の心は」を「最も人口に膾炙せる」歌と言ふ。

・日乃碕彌彦「短詩評釈人生行脚と大自然」（昭和九年七月、教文社）は、『調鶴集』より四首を引き、解説を附す。

・金井紫雲「虫と芸術」（昭和九年十月、芸艸堂）には、蠶、蚊を詠んだ文雄の二首（一九四、七五二）が『調鶴集』より引かれる。

・藤田徳太郎「幕末歌壇不振の原因と其の時代の文学思潮」（『短歌研究』三卷十号、昭和九年十月、改造社）は、「井上文雄に至つては、歌壇的地位において最早知紀に及ばないが、彼も亦必ずしも歌壇的存在と云ふにふさはしくない人ではない。併し、今日から見て、本当に優れた歌人であり、技術も作品価値も、高く評価せられると思はれる人が、いづれも、さうした歌壇的存在の圏外に出てゐるのである。」と述べる。

・『国語国文学講座 第十卷』(昭和九年十月、雄山閣)は、吉澤義則「国語学史」を収める。上田秋成の仮名遣書『靈語通』(寛政九年刊)を「発音主義の如く見えて、歴史主義の様な処もある」と評し、『靈語通』を祖述したものととして文雄の『仮字一新』を挙げる。

・小泉芝三「明治歌人の研究」(山本三生編『日本文学講座 第七卷』(昭和九年十二月、改造社)は、「近世末期に於ける優れた歌人であつて、江戸派随一の称がある。」と言ふ。

・佐佐木信綱「近世の諸歌人」(佐藤義亮編『日本文学講座 第九卷』昭和十年二月、新潮社)は、文雄を「特色を有する歌人」に位置づける。

・廣野三郎「明治先駆者の歌集再検討」(『短歌研究』四卷三号、昭和十年三月、改造社)は、文雄、福田行誡、天田愚庵、落合直文、正岡子規の和歌に就て論ずる。『調鶴集』及び『調鶴集 二編』の歌を題材としてをり、「新派和歌初期の傾向に接近してゐるものがある。」と説く。

・垣内松三は「晩翠居閑話」(『コトバ』五卷四号、昭和十年四月、国語国文学会)に於て、「萬葉集の歌を誦むには、御歌所風の声調の定型がないのであるから、全く自己流で歌によつては勝手に行はつてもよいやうであるが、幕末の井上文雄門下に行はれたものとして、故岡村御蔭先生から教へられ、先師も好んで朗誦せられた萬葉集声調を思出して見ると……」と述べるも、文雄門下の「萬葉集声調」に関しては未詳。

・窪田空穂「現代短歌の概観」(『早稲田大学文学講義』四十八回十一号、昭和十年四月、早稲田大学出版部)↓窪田空穂全集 第八卷『昭和四十年五月、角川書店)では、文雄を評して「時の人から、景樹以後の歌口だと評されてゐた。歌集を『調鶴集』といつて、當時はもとより、後からも相当に尊重されたものである。」と言ふ。

・熊谷武至「明治大正歌書歌集禁書考」(『日本短歌』四卷四号、昭和十年四月、日本短歌社)は、「歌が筆禍となつたもの」として『諷歌新聞』を唯一のものとして挙げる。

・皇道乃日本社鑑修『皇道乃日本皇道教育乃卷・静岡県勢誌及静岡県郡市町村誌』(昭和十年四月、皇道乃日本社浜松支社)は、文雄の長歌(調鶴集・九二七、九二九)に「日本魂皇道精神」を見てゐる。

・蛭原八郎「文学雑誌書目解題」(山本三生編『日本文学講座 第十七卷』昭和十年五月、改造社)↓『明治文学雑誌』昭和十年七月、学而書院)は、明治時代に刊行せられた文学雑誌の解題。『諷歌新聞』を「未だ新聞から分化せぬ時代の極めて幼稚な変態的存在」と評する。

・「大楠公六百年祭」を記念して、佐賀楠公会によつて編まれた『楠氏余薫』(昭和十年五月、木下泰山堂)には、「天の下払ふちはやのひとおろし神とも神のしわざなりけり」(調鶴集・八三〇・楠正成)が収録せられる。

・中村孝也編『楠公遺芳』(昭和十年五月、大楠公六百年大祭奉賛

会)も同様に、楠正成を詠じた一首(調鶴集・八三〇)を収める。

・中山太郎『愛慾三千年史』(昭和十年八月、サイレン社)は、松の門三脚子を語るにあたり、師たる文雄の容貌が記されてをり貴重である。曰く「生れつきの好男子で、今業平とまで練名されてゐた。……その門人は作歌の方よりは男前を慕ふ女が多く、殊に田安家の奥女中などは、旧縁をたどつて文雄に近づく手段として歌の稽古に来る者が多く、女子関係ではかなり鼻持のならぬ噂が多かつたのである。」と。また、「井上文雄、彼は歌人と云ふより幫間と云ふ方が当つてゐる。……殊に彼の不行跡には眉をひそめねばならぬ事が多い。」とも記される。

・石川彌太郎編『名所旧蹟案内とその詩・歌・俳句集』(昭和十年九月、文洋書院)に収録せられる文雄の歌十二首は『調鶴集 二編』(『現代短歌全集 第一巻』昭和六年四月、改造社)からの引用。

・松本與三郎『江戸時代の歌人とその作例』(『国漢研究』八十三号、昭和十一年二月、名古屋国文学会)は、香川景樹、熊谷直好、木下幸文、大隈言道、平賀元義、加納諸平、井手曙覧、文雄、八田知紀、野村望東尼と太田垣蓮月尼に就て、それ／＼略伝、歌論、歌風を述べ、作例を示す。文雄の歌論の特徴として「気概ある歌」を欲したといふことを挙げる。

・香坂昌康『爐辺閑話』(昭和十一年三月、篤農協会)「第十三 国民精神の大本」に、文雄の一首「日の本のやまとだましひかためつ、さて唐さえも学ぶべきかな」(出典未詳)が谷川士清、伴信友、

大国隆正、佐久良東雄、八田知紀の歌と共に引かれる。

・金井紫雲『鳥と芸術』(昭和十一年四月、芸艸堂)には、水鶏を詠んだ文雄の二首が『井上文雄翁家集』より引かれる。

・読売新聞社便利部編『こんなものが金になる』(昭和十一年十月、八重洲書房)「和歌と短冊」の節に於て「いま売物になつてゐるもの」として、「井上文雄(八十銭)」「井上文雄(自画讃二円)」が掲載せられる。ちなみに師岸本由豆流は六円、二円の二種、門人佐々木弘綱は文雄と同額の八十銭。僧文雄二円はその稀少性ゆゑであらうが、中村秋香二円五十銭は如何なる訳か。

・伊藤太郎『日本魂による論語解釈 八俯第三』(『同 里仁第四』(昭和十一年十一月、論語研究会)は、香川景樹の言「論語は天下第一の歌書なり」(山縣篤蔵『藝苑叢話』明治三十年五月、吉川半七)を旨として執筆せられた書。註釈の後に記される「日本趣味」の項に、それ／＼『調鶴集』より三首(八二〇、七六七、八六一)、一首(七四)が引かれる。「川喜田久太夫後援」(扉)によつて出版せられた本書だが、「川喜田久太夫」は、伊勢の豪商川喜田家十六代当主半泥子(本名久太夫政令、明治十一年、昭和三十八年)のこと。十四代川喜田政明は、文雄の『伊勢の家つと 三編』出版に大きく関はつた(後述、中澤伸弘「川喜田政明と佐々木弘綱」『皇學館論叢』令和四年四月)。

・金子元臣「詠進歌の昔と今」(『短歌研究』五卷十二号、昭和十一年十二月、改造社)は、「明治前後に至つて、江戸の歌人として大

きな存在は井上文雄であった。その門下は文雄の死について多く凋落し、独り佐佐木弘綱を遺した。」と記す。

・蘇武緑郎編『明治史総覧 第二卷』（昭和十一年十二月、明治史刊行会）では、「明治初期の和歌」（第十章第四節）の項に於て「調鶴集」より二首が引かれ、「初期歌人中で異彩を放つてゐるもの」として紹介せられ、「明治初期の新聞」（第十章第七節）の項では「諷歌新聞」に就て簡略に記される。

・沖谷忠孝編『か、み』（昭和十二年二月、石川県立飯田高等女学校）は歴代の御製、詔勅、和歌、俳句、漢詩等を取める。「鍊心百首」の章に「朝夕にうまず急がず怠らずまなびの道はゆくべかりける」が引かれる（『調鶴集』では第五句「ゆくべかりけり」）。

・堀江秀雄編『文藝化せられたる楠公』（昭和十二年三月、奉公会）は、正成を詠じた一首を『調鶴集』より引く（八三〇）。

・文雄に私淑する歌人金子薫園は、「朝つゆや井上文雄の碑に礼し妹の墓にゆくほそき苔路」と詠む（『白鷺集』昭和十二年六月、新潮社）。

・国民精神修養会編『一日一訓その日の修養』（昭和十二年十二月、崇文堂出版部）は、其の書名のとほり一日につき一つの訓話を記し、三百六十五日分を纏めたもの。三月四日「大和心は春のあけぼの」の項に文雄の「潔よき大和心を心にて、よそには咲かぬ花桜かな」（『調鶴集』七四）が紹介せられる。

・金井紫雲『天象と芸術』（昭和十三年一月、芸艸堂）には、虹を

詠んだ文雄の一首（二五九）が『調鶴集』より引かれる。

・小泉琴三「戦争と短歌―明治年間に於ける―」（『日本短歌』七巻一号、昭和十三年一月、日本短歌社）では、『諷歌新聞』を採り上げる。『諷歌新聞』を「歌集とも見られるし雑誌とも見られるものである」と言ふ。

・渡辺順三『短歌論』（昭和十三年七月、三笠書房）「第一章 幕末歌壇の延長としての明治初期歌壇」の「江戸派」の節に於て「絢爛たる江戸化政期の文化を背景として興つた江戸派の歌人として、まづ第一にあぐべきは井上文雄である。」と述べ、文雄の王朝的趣味の歌が、与謝野晶子に影響を与へたと記す。

・塚本哲三『精説新版作文学び方考へ方と作り方』（昭和十三年十月、考へ方研究社）「修辞法の考察」の章に於ては、「古戦場」を採り上げ、「咏歎法」の例として「名文として最も人口に膾炙してゐる一例」と説く。

・蘆田伊人、糟谷季之助編『松平春嶽全集 第一卷』（昭和十四年一月、三秀舎）には、随筆『雨窓閑話稿』（明治十七年五月脱稿）が収録せられ、「井上文雄のこと」と題する一節がある。慶永是和歌を文雄に学んでをり、文雄を評して、歌学には長じてゐるもの、「医師は格別上手にてなし。」と言ふ。ある大名家での歌会で詠んだ「雪中鷹狩」に関する挿話、『諷歌新聞』発刊によつて逮捕せられた話が語られる。

・八波則吉『随筆分に応じて』（昭和十四年二月、東洋図書）「桜花

に寄せた愛国の熱情」の章では、宣長の「桜花三百首」を紹介し、「翁（註：宣長）」と同じ心を詠んだ歌」として、文雄の二首「いさぎよき大和心を心にてよそには咲かぬ花桜かな」「いかならん絶えて桜のなしと聞くもろこし人の春の心は」が引かれる。

・吉原良三『詳註孝経心解』（昭和十四年二月、康文社）は、「さまざまの憂きにたへても世にふるは子といふもののあればなりけり」の一首を収める。

・山本文雄「明治新政府の新聞政策」（『歴史学研究』九卷三号、昭和十四年三月、續文堂出版）は、『諷歌新聞』による文雄御牧の逮捕を、慶応四年四月とするも、正しくは同年十一月。四月は刊行。

・伊藤湜編『短歌玉鳥集』（昭和十四年五月、沙羅書店）は、文雄の詠二首を収める。

・「日本短歌小辞典（十）」（『日本短歌』八巻五号、昭和十四年五月、日本短歌社）に立項せられる「井上文雄」には、「近世のすぐれた歌人の一人」といふ評がある。門人「草野御民」は「御牧」の誤り。

「日本短歌小辞典（八）」（同八巻三号）には「伊勢の家つと」が立項せられてゐる。

・重松信弘『国語学史概説』（昭和十四年十月、東京武蔵野書院↓『刪修国語学史概説』昭和十八年六月、東京武蔵野書院）は、上田秋成『靈語通』に対して「僅に井上文雄が仮字一新で賛したのみ」と述べるにとどまる。

・『新萬葉集』（昭和十二年十二月〜十四年六月、改造社）に収録せ

られた詠歌を論ずる、木俣修「新萬葉集の佳作研究」（『短歌研究』八巻十一号、昭和十四年十一月、改造社）に於ては、「江戸派の歌人といふ事になつてゐるが、この人の歌調も何流といふ風に簡単に片附けられない位、自由なものである。」と評せられる。

・吉澤義則『国語学史』（昭和十四年十一月、東京修文館）は、『国語文学講座 第十卷』（昭和九年十月、雄山閣）所収「国語学史」の増補版。文雄の「仮字一新」を紹介する。

・久松潜一『日本精神歌集』（昭和十五年七月、内閣印刷局（日本精神叢書七））「明治時代の和歌と日本精神」には、明治天皇、昭憲皇太后、八田知紀に続いて文雄の歌三首が収められる。

・加藤仁平『菅家遺識—和魂漢才—』（昭和十五年八月、内閣印刷局（日本精神叢書三十六））に引かれる文雄の言「大和魂を振り起して人間有用の学問に後進を導くなむ、報国赤心の片端とも言ふべかりける」は、佐々木信綱『日本歌学史』を出典として記すが、原典は文雄の歌論書『道のさきはひ』である。他に『調鶴集』より短歌一首、長歌一首（部分）を引く。

・佐野年一「歴史行事今日の話題」（昭和十五年十月、大日本雄弁会講談社）「十一月十八日」の「命日」には文雄の記事が載る。著作に「いづれも今日伝はらない『名字彙』『和学弁』『詞林菜』を挙げてゐるのが面白い。なほ、文雄の次には加藤千浪（明治十年歿）が掲載せられ、同じ日に逝いたことが知られる。

・新村出は「檀の実」（『多磨』十一巻四号、昭和十五年十月、多磨

短歌会 ↓「ちぎれ雲」昭和十七年九月、甲島書林) に於て、櫛の花を詠んだ早い例として文雄を挙げ、また、「櫛原宮の歌」(『短歌研究』九卷十号、昭和十五年十月、改造社) では、「幕末になると、突如として櫛原宮を仰ぎ奉る大作が続出して来た。」と記し、文雄の長歌「安政戊午秋日有感作歌短歌」(調鶴集・九二九〜九三〇)、と八田知紀の長歌を紹介する。

・日本郵船株式会社編『海の和歌集』(昭和十五年十一月、日本郵船船客課) は、海を詠んだ八首を収録する。

・吉田辰次『近世雅文名篇』(昭和十六年四月、研究社〔研究社学生文庫〕) は、『井上文雄翁家集』より「古戦場を弔ふ詞」「年賀祝の勸進を辞する詞」の二篇を「情操文学」の部に収める。

・安川安太郎編『頭註国文学新選』(昭和十六年六月、大同書院) は、『調鶴集』より三首を収める。

・高田浪吉『作歌の問題』(昭和十六年十一月、三省堂) は、文雄を「歌論家だつた。気概の高い人で、作品の上にそれが見られ、世を諷刺する事象が多い。」と評する。

・吉原敏雄『概観短歌史』(昭和十七年三月、大日本出版社峰文荘) は、「江戸派系の自由派」と捉へる。

・愛知県教育会編『国民聖典』(昭和十七年六月、愛知県教育会) は、詔勅、御製、和歌(勅皇愛国歌選)等を纏めたもの、鈴木胤研究の権威岡田稔による頭註を附す。文雄は「日の本の大和魂固めつ、さてからざえも学ぶべきかな」(出典未詳)の一首が採られる。

・斎藤瀧『防人の歌』(昭和十七年六月、東京堂)「第三篇 現代愛国歌」では、「日の本のやまと心の動きなきしるしは富士の高嶺なりけり」が引かれる。

・山本信哉編『神道要典国体編』(昭和十七年七月、博文館)には、『調鶴集』より「不二」(七六一)、「花」(七四)の二首が引かれる。

・内田茜江は其の晩年、回想記『明治文学逸話』(昭和十七年十月、女性時代社)を著し、「平井晩村を懐ふ」の章に於て、小説家にして詩人晩村の歌を「田園生活時代の井上文雄に稍近いといへると思ふ」と述べる。なほ、同書には「武田耕雲斎と松の門三艸子」の章もある。

・小島清編『中等学生のための朗詠歌集』(昭和十七年十月、湯川弘文社) は、「日本のやまと心のあらいそにくだけてかへる沖つしら浪」を収める。

・秋山公道『明治大正時代書道史』(長坂金雄編『日本書道文化史』昭和十七年十一月、雄山閣)では、大隈言道、野々口隆正、八田知紀等とともに「かなをよくした人」として文雄が挙げられてゐる。

・前田夕暮『青天祭』(昭和十八年二月、明治美術研究所)所収「真珠抄―歴代名歌選―」は、神武天皇より大田垣蓮月に至る歴代名歌百首を撰んだもの。文雄は「春雨に青む垣根のこぼれ種茎だつみれば鈴菜なりけり」が引かれ、「個性のあらはれを説いた幕末の歌人で、相当に高く価値されてよい。」と語られる。

・小野則秋は、『日本蔵書印考』(昭和十八年七月、文友堂書店)に

一八二二)の章で、文雄の詠「すみだ川中州を越ゆる潮先に霞流れて春雨のふる」(調鶴集・六三)を引き「佳品だと思ひますが、霞流れては萬葉に学んだものかと思はれます」と記す。

・岩村武勇「鳴門」(昭和二十三年七月、岩村武勇)には、土佐泊潮明寺に存する紀貫之歌碑に誌した文雄の撰文が全文掲載せられる。

・和田信二郎「巧智文学」(昭和二十五年一月、明治書院)は、「なやみふすこの頃問ひこやつれにしみの葉ただそこにこそこへ」(調鶴集・九二〇)といふ杳冠の歌を紹介する。「名古屋味噌少したべ」の意。

・岡麓「明治二十年のころ―歌と絵と芝居と―」(『展望』五十号、昭和二十五年二月、筑摩書房)は、明治二十年頃の和歌の流行に就て「千蔭とか春海とか浜臣とかいふ様な人のは勿論古くつて加納諸平や井上文雄などは幾らか新味があつた。」と述べる。

・李家正文「らくがき史」(昭和二十五年三月、実業之日本社)は、『諷歌新聞』の一件に就て述べるが、『諷刺新聞』としてしまつてゐる。

・近代短歌辞典刊行会編『近代短歌辞典』(昭和二十五年八月、新興出版社)「井上文雄」の項は服部直人の執筆。「自然な歌風」と評する。

・「五十にて老叟さびし芭蕉あり六十にて情婦もちし井上文雄あり」の一首は赤井哲太郎の作(『沃野』四十三号、昭和二十五年十月、沃野社)。赤井哲太郎は、静岡県磐田市の歌人(明治三十五年〜昭和五十六年)。歌集『淡雲』(昭和四十三年一月、新星書房)。

・三松草一「歌壇先覚者の業績―和歌も進歩発展する―」(『短歌芸術』七巻四号、昭和二十六年四月、芸術生活社)は、言道、曙覧に続いて文雄を採り上げ、「新作に富むことは認められるも、当代の歌風に流され、や、平俗歌調軽きを悲しまざるを得ない」と評する。

・谷馨は、『現代短歌精講』(昭和二十八年十二月、学灯社)に於て「特に文雄はその歌才に於いて景樹以来とも称された。」と評する。

・次田潤『国文学史新講 下巻』(昭和二十八年十二月、明治書院)「国学と和歌」の章で「広足〔註：中島〕よりも更に注意すべき歌人は井上文雄(明治四年歿七十二)であり、「文雄は江戸派の流を汲んだ人ではあるが、晩年には流派から超脱して、自由の天地に個性の鮮明な歌を詠んだのであつて、前に述べた曙覧や後に記す安藤野雁・大隈言道などと共に、明治の新派の先駆として注意すべき」であると述べる。

・つださうきち『文学に現はれたる国民思想の研究 第四巻』(昭和三十年一月、岩波書店。津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究 平民文学の時代 中』(大正十年十二月、洛陽堂)の増補改訂版)では、香川景樹の歌風の影響を受けた江戸の歌人として文雄が指摘せられる。

・武田祐吉『通解名歌辞典』(昭和三十年五月、森北出版)には、『調鶴集』より十一首が引かれる。巻末の「和歌史概説」では「江戸派とは言いながら、桂園派の影響も受けて居り、感懐に応じて格調を変化し、独自の歌風が見られる。」と評せられる。

・牛島俊作『日本言論史』（昭和三十年九月、河出書房〈河出新書〉）は、『諷歌新聞』による文雄御牧の逮捕を明治元年閏四月としてゐる（正しくは同年十一月。四月は刊行）。

・西田長壽「新聞雑誌の発達」（『国語と国文学』三十二巻十号、昭和三十年十月、至文堂）は、「弾圧を受けた最初の文学雑誌」として、『諷歌新聞』を紹介する。

・小田切秀雄「日本の国家権力と文学―弾圧された文藝作品―」（『群像』十一巻六号、昭和三十一年六月、講談社）は、『諷歌新聞』発刊による文雄の逮捕を「敗戦までの七七年間に日本の文学者・文学研究者・出版者で逮捕または起訴された者」の第一と捉へてゐる。

・木俣修は、『歌論集近代歌人群像』（昭和三十一年八月、新典書房）に於て、文雄の歌を評して「江戸に居住している人の、こうした清新、軽快な歌風は、やはり当時の歌壇を刺衝しないではおかなかつたらうと思う。」と述べる。

・松山秀美「歌人群像」（昭和三十一年十月、高知市立市民図書館）「安並雅景」の章では、末松正樹から安並雅景に宛てた書翰を引き、文雄は「門人に御大名様方を持ちたき野心がある」ことと、「文雄の梅軒（註：畠山常操）評」といふが紹介せられる。安並雅景は、土佐国の国学者。谷真潮の外孫。安永九年〜嘉永四年、七十二歳。

・久松潜一編『日本文学史近代』（昭和三十三年六月、至文堂）「第五章 短歌」の「一 近代短歌の成立」では、「幕末歌人の開国論者海野遊翁・佐久間象山・井上文雄」が、いち早く新題歌を詠ん

でゐると指摘するも、果して文雄は「開国論者」なのであらうか。執筆者の記載はないが、後述、片桐頭智「近代短歌の誕生」（昭和三十三年二月）の記述から考へるに、片桐の執筆であらう。

・『短冊井上文雄歌集』（昭和三十三年十一月、湯浅四郎）を上梓した築瀬一雄は、

調鶴集の井上文雄わがそばにぐつと近よりし今年と思はむ

縁ありてわが手に成れる小冊子文雄短冊集に蔵印を捺す

と詠んでゐる（『沃野』一三二号、昭和三十三年二月、沃野社）。

・片桐頭智「近代短歌の誕生」（窪田空穂、土岐善麿、土屋文明編『近代短歌史 第一巻』昭和三十三年二月、春秋社）に於ても、「幕末の開国主義の歌人海野遊翁、佐久間象山、井上文雄」とある。

・多賀博「物語の中の短冊 一」（『日本美術工藝』二五〇号、昭和三十四年七月、日本美術工藝社）では、文雄の書いた短冊の総数を「早詠み早書きの名人で、今日に伝わる短冊は無慮四五万はある。」と推定し、文雄御牧の筆禍短冊を写真版で紹介する。

・松田修「花と文学」（昭和三十四年十月、芸艸堂）には、いぬたでを詠んだ文雄の一首（二八四）が「調鶴集」より引かれる。

・伊藤嘉夫「短歌作風変遷史近世」（『短歌』七巻一号、昭和三十五年一月、角川書店）は、細川幽齋から天田愚庵までを組上に載せる。文雄は「調鶴集」より五首引かれ、「当時（註：幕末から明治初期）最高の歌人といえよう。」と評価せられる。

・針ヶ谷鐘吉編『植物短歌辞典』（昭和三十五年二月、加島書店）

には、うり、おぎ(をぎ)、かし、くず、くり、さくら、すすき、た
で、はぎ、はちす、ももを詠んだ十一首が用例として収められる。

・日本新聞百年史刊行会編『日本新聞百年史』(昭和三十五年十一
月、日本新聞百年史刊行会)は、『諷歌新聞』を採り上げる。

・小松英雄「字音研究の歴史」、峰岸明「文字・用字法研究の歴史」
(佐伯梅友、中田祝夫、林大編『国語国文学研究史大成15 国語学』
昭和三十六年二月、三省堂)に於ては、『磨光韻鏡』(延享元年刊)
及び『和字大観抄』(宝暦四年刊)を井上文雄の著作としてゐるが、
これらは無相と号した音韻学者、僧文雄(元禄十三年〜宝暦三年)
の著作である。『磨光韻鏡』『和字大観抄』の著者僧文雄が、井上文
雄であると誤解せられるに至つた大きな要因は此処にあるのではあ
るまいか。

・なほしろせいたらう「音訓」の古事記(48)、「肇国」二十四卷
四号、昭和三十六年四月、肇国神祇聯盟)には「井上文雄の磨光韻
鏡」とあるが、『磨光韻鏡』は、僧文雄の著。

・松田修『花の歳時記』(昭和三十九年二月、社会思想社〔現代教
養文庫〕)は、「植物文学事典」(はしがき)。文雄はカザグルマ(風
車)、カシ(檉・榿・櫛)、クルミ(胡桃)、タデ(蓼)を詠じた四首
が採り上げられる。

・岩崎栄「男の紋章」(『小説倶楽部』十七卷七号、昭和三十九年五
月、桃園書房)は、文雄と松の門三艸子との交際を描いた恋愛小説。

・木俣修は、『近代短歌の史的展開』(昭和四十年五月、明治書院)

「第一章 短歌革新の始動とその展開」に於て、幕末明治初期の江
戸派の中で「文雄などは歌才のある作者であつた」と記す。

・岩淵武一「叛骨藤右衛門」(『方寸』一号、昭和四十一年六月、酒
田古文書同好会)は、出羽国酒田の自由民権運動家森藤右衛門の事
蹟を紹介する。「明治二年四月には諷歌新聞の井上文雄」が逮捕せ
られたと記されるも、逮捕は明治元年十一月のこと。

・松原博一「日本文学における人間と思想」(昭和四十一年六月、文
京出版)「第六章 近世文学覚え書」では「井上文雄(一八〇〇—
一八七二)は、明治の和歌先覚者金子薫園や佐々木信綱らに強い影
響を与えている近世末期に逸することのできない秀抜な歌人であ
る。」と位置づける。

・長岡博男『日本の眼鏡』(昭和四十二年九月、東峰書房)「眼鏡の
うた」の章では「こと国のめがねとかいふ物をのみはなたぬまでに
おいにけるかな」が家集『老のくりごと』より引かれる。

・竹下数馬『文学遺跡辞典詩歌編』(昭和四十三年五月、東京堂出
版)は、「人間」「金の岬」「下紐関」を詠んだ文雄の和歌を掲載
する。

・山崎敏夫「近代短歌発生と成立の背景」(『和歌文学研究』二十三
号、昭和四十三年六月、和歌文学会)は、「幕末から明治へかけて
の有力な専門的民間歌人であり、「調鶴集」の著者となつた井上文
雄の存在なども、この場合注目せらるべきである。」と述べる。

・橋本政次の著した『播磨古歌考』(昭和四十五年十月、播磨史籍

刊行会↓復刻版平成七年十月、姫路文学館）は、播磨国を詠じた萬葉から明治初期に至る「古歌」を蒐集し、解説を加へた労作。文雄は『調鶴集』より二首（一〇五、三三二）採録せられてゐる。

・昭和四十三年より刊行せられた『本居宣長全集』筑摩書房だが、第十三卷（昭和四十六年九月）「解題」で編者大久保正は「井上文雄の『和字大観鈔』と記すも、これは僧文雄の著作である。

・内野吾郎「国文学名義考―和字から国文学へ―」（『日本文学論究』三十四冊、昭和四十九年十一月、國學院大學國文学會）も、『和字大観抄』（宝曆四年一七五四井上文雄）と記す。

・青木紀元「福井県内の国文学資料（三）」（『国語国文学』十九号、昭和五十一年五月、福井大学言語文化学会）は、文雄邸に於る松平慶永（春嶽）その他の人々の月々の歌会の詠草集『月次集』『睦月集』『衣替着集』、文雄の添削した慶永の家集『百葉集』『類鶯集』『言志集』（福井県立図書館所蔵）が紹介せられる。

・熊谷武至「大野定子の板下」（『水薺』六十三卷七号、昭和五十一年七月、水薺社）↓「続々歌集解題余談 式」平成元年七月、水薺名古屋支社）は、定子が『伊勢の家つと 二編』弘綱跋文、『さきはひ草』の板下を書いてをり、筆蹟も文雄に近いものがあると述べる。

・木俣修「明治短歌史2」（『短歌現代』一卷二号、昭和五十二年八月、短歌新聞社）では、文雄を評して「比較的歌才にめぐまれていた作者であった。」と述べる。

・長谷川莞爾は、高校時代に手にした「現代日本文学全集」の第

三十八篇『現代短歌・現代俳句集』（昭和四年九月、改造社）を回想し、其の巻頭に収録せられる旧派歌人の詠を引き、文雄の一首「うち霞む汐瀬の舟は動くとも行くともなしに遠ざかりぬる」（『調鶴集』六七）を評して「たんなる咏嘆を超えて象徴的ですからある。」と述べる（『定型論私稿II』『短歌人』四十卷二号、昭和五十三年二月、短歌人会）。

・須羽源一「近世名流能書家伝（二）」（『書論』十二号、昭和五十三年五月、書論研究会）には、文雄の略伝も掲載せられる。

・井上宗雄、藤平春男（『対談』歌論から俳論へ）（『俳句』二十七卷十二号、昭和五十三年十一月、角川書店）に於ては、両者とも文雄の詠を「おもしろい」「いい歌」と評し、「近代に近づいた歌人の一人」（藤平）と捉へる。

・中西正幸「神宮祠官の宇宙観」（『瑞垣』一一一号、昭和五十五年八月、神宮司庁）に記される「韻学の大家井上文雄」は、僧文雄のこと。

・宮下三奈男「佐久間象山と『省言録』―生誕百七十年にあたり先生の御靈位にささぐ―」（『信濃教育』一一三八号、昭和五十六年九月、信濃教育会）は、文雄を象山の和歌の師であるとし、「万葉仮名を駆使し束縛なき詠歌をあえてし巧妙の境地に達していた。」と評する。「万葉仮名を駆使し」に就ては存疑。

・熊谷武至「『調鶴集』板下」（『水薺』六十九卷一号、昭和五十七年一月、水薺社）↓「続々歌集解題余談 式」平成元年七月、水薺名

古屋支社)は、『調鶴集』の板下は松の門三艸子を書いてゐるといふ仮説を述べる。

・宮崎十三八「私の城下町会津若松」(昭和六十年四月、国書刊行会)所収「飯盛山の記念碑」では、山内香溪「思ひ出乃記」碑が紹介せられ、文雄、御牧等の獄中生活が語られる。

・伴五十嗣郎「松平春嶽撰『言志集』『和漢詠史』『古今百人一首』」(『皇學館大学神道研究所紀要』三集、昭和六十二年三月、皇學館大学神道研究所)で紹介せられる『言志集』は文雄添削本。「我が国を「君と臣の正しき国」、君臣の名分が最も厳正である国と確信」してゐる春嶽に、文雄は巻末に「おのか愚なる心に常に申こと、

も、空しからすと、感涙と、め兼侍り」と感激の講評を認めてゐる。

・井上宗雄、中村幸弘編『福武古語辞典』(昭和六十三年九月、福武書店)は、別冊として井上宗雄、雲英末雄編『名歌名句鑑賞事典』を附す。和歌に就ては「上代から近世までの和歌・歌謡八四七首を採り上げ」(凡例)てをり、文雄は『調鶴集』より一首(六七)採られてゐる。徳川時代の歌人は二十名(三十七首)収録。

・稲田利徳「西行和歌覚え書―「ぬれぬれ摘まなかたみたぬきれ」―」(『解釈』三十五卷一号、昭和六十四年一月、解釈学会)は、西行の「かたみたぬきれ」といふ珍しい表現は、『堀河百首』の「かたみぬきいれ」といふ措辞を積極的に摂取した可能性が高いと述べ、「かたみたぬきれ」「かたみぬきいれ」の解釈を示す。そして、文雄にも「身におはぬかたみぬきいれうなる子が山田の澤に若菜摘

むなり」(『調鶴集』三六)といふ一首があることを珍しい歌として紹介する。

五、平成・令和期

・鈴木健一「江戸時代と子どもの歌」(『短歌』三十八卷十一号、平成三年十一月、角川書店)に於ては、景樹、枝直の短歌の後に文雄の長歌「詠旅宿花」(『調鶴集』九二三)が紹介せられ、「こ」では、旅によって妻や子と遠く離れてしまったという状況が、妻や子への強い愛を認識する機会を与えた」と記される。

・『江戸時代和歌』同人の一人、松坂弘は「近世における絵画性―井上文雄、安藤野雁を中心に―」(『短歌現代』二十一卷三号、平成九年三月、短歌新聞社)で、文雄の和歌を「表現技法も大変に絵画的でかつ抒情的である。」と説き、「明治和歌の味わいを十分に備えている。」と結ぶ。

・望月真「流水不爭先―加茂日童上人の余薫―」(『宗教文化誌法華』八十三卷十一号、平成九年十一月、法華会)では、「善導云く、『三分なきものは人の皮を着たる畜生なり』。梵網經に云く、「戒を持たざるは、木頭とことならず、畜生とおなじ」とはいへり。」「沙石集」巻七)から、文雄の一首「紙をのみ費すみれば大方は虎の皮着る羊なりけり」(『調鶴集』八七四)を想起する。

・安田純生「金子薫園『片われ月』渋茶すすりて」(『短歌現代』

二十二卷三号、平成十年三月、短歌新聞社）に於ては、薫園の一首「わが世をばおもひわづらふ柴の戸に梅が香さむき片われの月」の先例として文雄の「さえくれし嵐は枝にしづまりて梅が香さむく月更けにけり」を挙げる。

・リース・モートン「近代詩歌の誕生―与謝野晶子の『みだれ髪』（一九〇一年）における新体詩と和歌の伝統」（『日本現代詩歌研究』三号、平成十年三月、日本現代詩歌文学館）は、旧派の例として文雄の一首「をどめ子が物はぢしたるおもかけに匂ひいでたる八重桜かな」とその英訳を掲げる。旧派の和歌には、「個人的なものも、新しい工夫も見られない。ただ単に使い古されたメロディのリズムを繰り返しているばかりである。」との厳しい見方をしてゐる。

・藤元直樹「幕末・明治初期雑誌目次集覧」（『参考書誌研究』六十五号、平成十八年十月、国立国会図書館）は、幕末、明治初期雑誌の所蔵機関、各号の細目を記したものの、『諷歌新聞』も「幕府側に同情的な落首新聞」として採り上げられるもの、発行所を「大神御牧」とし、何故か文雄に就ての言及はない。『諷歌新聞』の「取次方」は「日本橋通 上山八郎右衛門、日本橋 いつみ屋老泉、南伝馬町 文雅堂」。

・鈴木淳は、「鉄心斎文庫短冊渉猟 和歌・短歌編」（鉄心斎文庫短冊研究会編「むかしをいまに 鉄心斎文庫短冊総覧」平成二十四年八月、鉄心斎文庫伊勢物語語文華館）に於て、文雄の短冊に就て「三藐院流を学んだとおぼしき大振りて素朴な書体」と指摘する。

・中澤伸弘「幕末の国学者間宮永好その考証と文雅―『喚犬喚鶏舎 日次記』から（二）―」（『神道史研究』六十九卷二号、令和三年十月、神道史学会）では、横山由清『歌林襍考』（大正六年八月、歌文珍書保存会）や、安政六年九月二十二日に文雄邸で行はれた文章会の記録『文章会』（国立国会図書館蔵）の記述をもとに、永好と文雄の交流などが語られる。

・中澤伸弘「幕末の国学者間宮永好の考証会と歌会―『喚犬喚鶏舎 日次記』から（三）―」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊五十八号、令和三年十一月、明治聖徳記念学会）では、永好の日記『日次記』（盛岡中央公民館蔵）から、永好が参加した歌会に就て述べる。永好は、文雄の歌会を始め、加藤千浪、横山由清、天野政徳、蜂屋光世などの歌会に参加してゐる。

・大内瑞恵「近世国学と鷺見文庫―東洋大学附属図書館稲葉文庫 目録と研究3」（『東洋大学大学院紀要』五十八集、令和四年三月、東洋大学大学院）は、東洋大学附属図書館所蔵にかゝる鷺見文庫（山本嘉将旧蔵）紹介の第三報。文雄の天保十四年から弘化三年にかけての鷺見安歌宛書翰七通の大略が紹介せられる。鷺見文庫とは鳥取藩の国学者鷺見保明（寛延三年〜文化五年）、安歌（天明四年〜弘化四年）父子の旧蔵書である。

・中澤伸弘「川喜田政明と佐々木弘綱―石水博物館蔵政明宛弘綱書翰を読む―」（『皇學館論叢』五十五卷一号、令和四年四月、皇學館大學人文學會）は、「川喜田政明と井上文雄―石水博物館蔵政明

宛文雄書翰を読む―(『皇學館論叢』五十四卷一号、令和三年四月)の統稿。弘綱は政明に、伊勢津に於る文雄門人の獲得、「伊勢の家つと 三編」出版費用の援助といったことを依頼してをり、更に『伊勢の家つと 三編』川喜田政明序文は、実は文雄代作の文章であつたことが語られる。

・京都伊佐家の所蔵にかゝる短冊二千二百二十五枚、色紙百四十九枚を写真版で紹介、翻字も附した、伊佐家の短冊・色紙をよむ会編『伊佐家の短冊・色紙』(令和四年十月、伊佐錠治)には「名所子規」と題する文雄の短冊「泉河せのとひやかにさえたる、ころもかせ山啼く杜宇」が収録せられる。翻刻に「名所千起」「文唯」とあるは、それ〴〵「名所子規」「文雄」の誤りである。

・中澤伸弘「村上忠順「歌合序文」と井上文雄」(『村上忠順翁顕彰会報』三十四号、令和五年三月、村上忠順翁顕彰会)は、刈谷村上家所蔵にかゝる『蓬蘆集 春夏』(『村上忠順家所蔵図書目録』(平成二十一年三月、豊田市教育委員会)整理番号92)に挟まれてあつた忠順筆による『二百番歌合』序文章稿の加筆修正者は、その筆蹟から文雄であると指摘する。

・岡田貴憲「横山由清と平安仮名日記―日下田足穂からの蔵書継承の可能性―」(『ピブリア』一五九号、令和五年五月、天理大学出版部)は、由清、足穂の関係には文雄の介在があつたと説く。由清は文雄の門人、日下田(遠藤)足穂は下野佐野の国学者歌人。

・若井勲夫『大和魂・大和心の語誌的研究』(令和五年十月、錦正

社)「第八章 幕末維新期の新展開」は、「大和魂・心を詠み込んだ」文雄の長歌反歌(調鶴集・九二九〜九三〇・安政戊午秋日有感作歌短歌)、及び「いさぎよき大和心を心にて他国には咲かぬ山ざくらばな」「おほやけの大和魂ある人をもちりたまはば世はやすからむ」の二首に就て解説を加へる。

六、未見

・石田元季「井上文雄判二十五番歌合」(『国の花』十二卷六号、昭和六年六月、中央歌道会)
 ・藤川忠治「近代秀歌鑑賞(三) 井上文雄の歌(三)」(『歌と評論』十七卷三号、昭和二十一年十一月、歌と評論社)

七、「井上文雄研究史」正誤

「井上文雄研究史」
 ・『短歌講座第十卷』(昭和七年五月、改造社)には、下村海南「短歌と新聞」を収める。↓「短歌と新聞」は、下村海南(宏)『南船北馬』(昭和七年七月、四条書房)に再録。
 ・熊谷武至「諷歌新聞」(『続歌集解題余談』昭和十八年十月、私家版)↓初出、『水甕』(二十一卷一号、昭和九年一月、水甕社)
 「井上文雄研究史(補遺)」

・南梁居士の編にかゝる『偉人豪傑言行録修養家訓』（明治四十四年十月、求光閣書店）↓初出は、水戸藩士小宮山綏介（南梁）の編輯した『近世豪傑譚』（明治二十五年三月、高橋省吾）。

「井上文雄研究史・補遺（其ノ二）」

・関根正直「江戸の文人村田春海」（『随筆からすかこ』昭和二年十月、六合館）↓「随筆からすかこ」は、『史話俗談』（大正九年十一月、国民図書）の改題増補版。但し、『鎌倉室町兩時代の服装』「徳川時代服制一斑」の二編は削除せられる。

「井上文雄研究史・補遺（其ノ三）」

・市毛保家『擬古文新釈』（昭和七年十二月、栄光社）は、『柯堂文集』より「惜花」「晝擣衣」「旧都」「長歌論」「竹」の五篇を収め、語釈、通釈が為される。『柯堂文集』に就ては未詳。『柯堂文章』（天理大学附属天理図書館所蔵）には、「竹」以外の四篇が収録せられ、「竹」の典故が気にかゝるところである。↓『柯堂文集』は、『調鶴集』文集の部「調鶴文章」であらう。「竹」は「竹をうゝる詞」である。

「井上文雄研究史・補遺（其ノ四）」

・嵯峨正作編『大日本人名辞書』（明治十九年四月、経済雑誌社）は、「井上文雄は和学者なり通称は元真、歌堂及び調鶴等の号あり（統江戸墓所一覽）」と、簡略な記述にとゞまる。『統江戸墓所一覽』は、源氏樓若紫編。『統墓所一覽』『江戸統墓所一覽』とも。↓『統江戸墓所一覽』は未詳。

・萩野和庵（由之）「学者の伝統と筆迹」（『短冊』三号、大正十年六月）↓初出は、『こゝろの華』十卷十一号（明治三十九年十一月、竹柏会出版部）。

・鈴木健一「近世文学史覚書―和歌篇」（『学習院大学文学部研究年報』六十七輯、令和三年三月）↓鈴木健一『日本近世文学史』（令和五年五月、三弥井書店）所収。

この他にも多くの誤謬があらうと思はれる。読者諸賢の御教示を冀ふ次第である。

をはりに

旧臘「国立国会図書館デジタルコレクション」が一新せられ、電子化資料の本文検索が可能になった。人物研究をするに当つては、忘れ去られて久しい人物の再発見といふことにも繋がつて来るであらうし、重宝この上ない仕組みなのであるが、其の余りの情報量の多さゆゑ、著名な人物に限つて言へば、枝葉末節を捨象し全体像を俯瞰するには、いさゝか困難が伴つて来るのではあるまいか。「国立国会図書館デジタルコレクション」で「井上文雄」と検索してみると、実に五千件にも及ぶ資料（僅かに其の名を記すだけのものや出版広告も含まれる）が表示せられる。其処から徳川時代の国学者歌人井上文雄に就ての論考を拾ふのである。同姓同名の人物も少な

からずをり、全ての文献に目を通すだけでも可なりの時間を費やした。しかし、それだけの価値はあるものと確信してゐる。

現在程検索の精度が高くなかつた十数年前、「井上文雄研究史」を纏める際には、『名家伝記資料集成』『国文学年鑑』『神道人物研究文献目録』等の記事を頼りに文献を渉猟し、其の缺は国立国会図書館、国文学研究資料館の論文検索で補つてきた。文雄に関する文献を網羅することを当初の目的としてゐたのだが、こたび「国立国会図書館デジタルコレクション」の本文検索を使用することによつて、其の目的は一応の達成に近づいて来てゐると思ふ。しかし、当然のことながら国立国会図書館に所蔵せられてゐない資料は検索の対象には含まれない。「六、未見」の節がある所以である。そして、電子化せられてゐない資料も多数あることから「デジタルコレクション」を以て事足りれりといふことにはならないのである。本稿に採り上げた文献資料の全てが「デジタルコレクション」に採録せられてゐるといふものではなく、ために其の恩恵に浴しつゝも、地道な古書店(展)、図書館通ひは今後も続けてゆく必要があるだらう。

【註】

- (1) 引用は、中山泰昌編『新聞集成明治編年史 第二巻』(昭和十一年六月、林泉社)に拠る。
- (2) 早稲田大学図書館データベース「WINE」(<https://waseda.primo.exlibrisgroup.com/discovery/search?vid=81SOKEL-WINE:WINE>)の記述に拠る。

- (3) 拙稿「井上文雄の短冊署名」(『成蹊國文』五十四号、令和三年三月)
- (4) 拙稿「井上文雄『調鶴集抄』―翻刻と解題―」(『成蹊人文研究』二十三号、平成二十七年三月)
- (5) 小林強「架蔵短冊資料点描」(大取一馬編『中世の文学と学問』平成十七年十一月、龍谷大学仏教文化研究所)、中澤伸弘「江戸の「江戸派歌人」の認識の一端―長瀬文豊『雁のはしら』をめぐつて」(『皇學館論叢』四十三卷二号、平成二十二年四月)、拙稿「井上文雄研究史・補遺(其ノ四)」(『成蹊人文研究』三十号、令和四年三月)参照。
- (6) 拙稿「井上文雄研究史」(『成蹊人文研究』十三号、平成十七年三月)に解説記事あり。
- (7) 販売目録『古今短冊』(坂本清商店)を刊行してゐた坂本清は、『國學院雜誌』(三十八卷十二号、昭和七年十二月)巻末広告に於て、「井上文雄和歌短冊 壹円」を掲げる。
- (8) 国文学者小林一郎(明治九年〜昭和十九年)が、友人である成蹊学園創立者中村春二の依頼により作つた「心の力(心力歌)」も収録せられてゐる。
- (9) 『國語と國文學』(二十四卷四号、昭和二十二年四月)所収「雑誌要目」の記載に拠る。「近代秀歌鑑賞(三) 藤川忠治

(歌と評論十一月号) 4。」

(10) 表紙、奥附に「第十七卷第三号」とあるもの、これは「第十八卷第一号」の誤りであらう。「編輯後記」には、「おそく

も十二月初には発送出来ようと予定してゐた十一月号が中旬の発行になつたため年内に十二月号刊行の目算立たず、やむなく十二月号は休刊して、本号を一月号として編輯した。」と編輯者藤川忠治は記す。十一月中旬に発行せられた号が未見ながら「第十七卷第三号」と思はれる。

(11) 令和五年九月十四日現在。

(12) 「戦前、帝国図書館時代に雑誌新聞は法定納本分が納められていなかった。そしてこのことは早くに忘れられ、戦前雑誌の九割方がNDLにないことが明らかになつたのは、ようやく一九八九年のこと。」(小林昌樹「図書館と古書店の未来―国会図書館のデジタルコレクション拡大で考えた」『日本古書通信』八十八巻三号、令和五年三月)

【参考】

「国立国会図書館デジタルコレクション」(<https://dl.ndl.go.jp/>)

「次世代デジタルライブラリー」(<https://lab.ndl.go.jp/dl/>)

【附記】

本稿を成すに当たり、こたびも多くの方々より御教示を頂いた。

また、実践女子大学図書館には資料の閲覧に際して多大なる便宜を図つて頂いた。記して感謝申し上げます。

(すずき・りょう 東京都立墨田川高等学校教諭)